

# 尾続経塚遺跡

県営中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003.3

上野原町教育委員会  
山梨県富士北麓・東部地域振興局



遺跡の発見状況



出土した経石

## 序

本書は、山梨県営中山間地域総合整備事業に伴う尾続経塚遺跡の発掘調査報告書です。遺跡は、道路の拡幅工事中に発見されたため大半は失われてしまいましたが、一部を調査し記録に留めることができました。

今回発見された経塚は信仰遺跡の一種で、今から約200年前の江戸時代に、地元尾続地域の人々が協力して小石を集め、これにお経を書き、祈りをささげた場所であったことが分かってきました。小石にどのような祈りや願いが込められていたのかは不明ですが、小石の一つひとつに丁寧に書かれた文字を見ると、人々の信仰に対する真摯な思いが伝わってきます。

幸いなことに、経塚の一部は、関係者のご協力で現地に保存されることになりました。先人の祈りが将来にわたって伝えられることでしょう。

本書の刊行にあたり、調査にご理解いただき、種々ご協力いただいた尾続区の皆様方を始め、関係機関・関係者に心から感謝申し上げます。

平成15年3月

上野原町教育委員会

教育長 水越偉成

## 例 言

1. 本書は、山梨県北都留郡上野原町桐原字尾続907番地、尾続経塚遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、県営中山間地域総合整備事業の一環による尾続営農飲雜用水施設建設に伴い、平成13年度に実施した。
3. 調査は上野原町教育委員会が実施した。現場調査時の組織はつぎのとおりである。

事務局 教 育 長 水越作成  
社会教育課長 白井和文  
社会教育係長 梅原秀雄  
担当者 社会教育係 小西直樹
4. 本書の執筆・編集は小西が行い、遺物の実測・トレースは古根村典子、河野彰夫（現町役場）が行った。
5. 調査および本書の作成にあたっては、尾続区の方々を始め、つぎの個人や機関のご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。奈良泰史（都留市役所）、杉本正文（人月市教育委員会）、田代孝（山梨県埋蔵文化財センター）、村上信行（龍泉寺）、山梨県教育委員会学術文化財課、上野原町役場経済課、長田組（株）敬称略・順不同
6. 本書にかかわる出土品・記録図面等は、一括して上野原町教育委員会が保管しているが、出土品については整理完了後に宝珠寺に移管する予定である。

## 本文目次

第Ⅰ章 遺跡の位置と周辺の環境 .....	1
第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過 .....	3
第Ⅲ章 調査の成果 .....	4
第Ⅳ章 まとめ .....	9

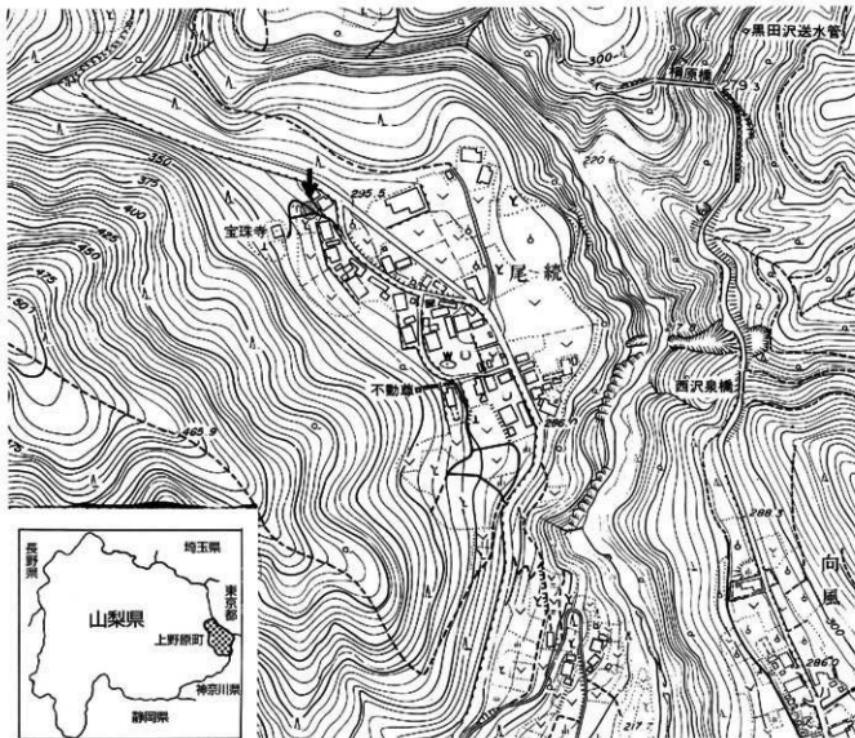
## 挿図・写真図版目次

第1図 遺跡の位置 .....	1
第2図 調査区の位置 .....	2
第3図 遺跡発見時の状況 .....	3
第4図 経塚の平面・断面図 .....	4
第5図 経塚の発見状況 .....	5
第6図 土層断面 .....	5
第7図 経石の出土状況 .....	5
第8図 出土遺物 .....	6
第9図 出土遺物 .....	7
第10図 経碑（上：妙典碑、下：石経塔） .....	8

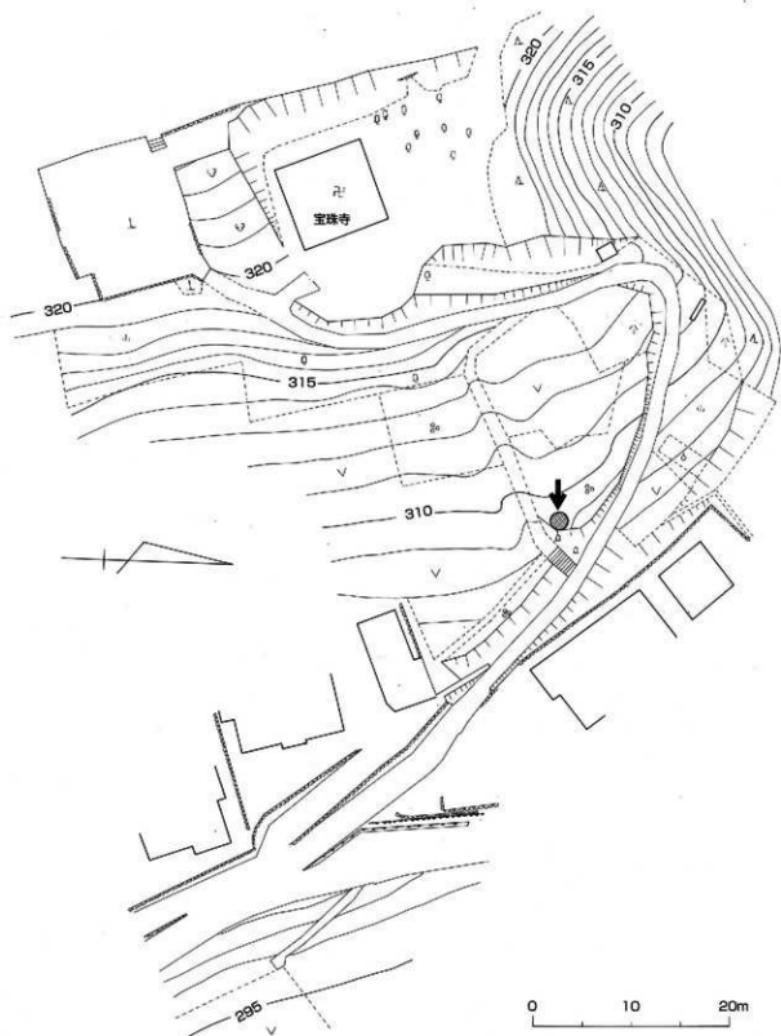
## 第Ⅰ章 遺跡の位置と周辺の環境

尾続経塚遺跡は、山梨県北都留郡上野原町桐原地区<sup>きりはら</sup>に位置する。桐原地区は山梨県東端の山間地に位置し、地区の中央を流れる鶴川や支流沿いに集落が点在する。このうち尾続の集落は、鶴川西岸の県道上野原・あきるの線沿いにあり、背後の山裾に宝珠寺・尾続神社・不動尊が点在する。文化3年（1806）3月の桐原村方明細書上帳によると、尾続の家数36軒、石高55石余で、このうち田高は1石余にすぎなかった。生活は畠と山林に依存し、農業の間、男は薪・株肥料等を取り、女は蚕・糸引き・機織稼ぎをした。薪炭・木材・屋根板などの林産品や、絹糸・絹織物などは上野原や東京都西部の五日市・八王子方面などへ商われた。

尾続経塚遺跡は、尾続の集落北端、宝珠寺の参道入口に位置する。宝珠寺は、応永19年（1412）説教聖和尚による開山で、創建時は現在地より南方約300mにあったと伝えられている。臨済宗建長寺派に属し、瑞光寺（桐原地区猪丸<sup>いのまる</sup>）の末寺である。本尊は聖觀世音菩薩。江戸時代の正保元年（1644）に焼失し、再建後、明和年間に台風で倒壊したため、天明5年（1785）現在地に移転したと伝えられる。現在は無住で、龍泉寺（上野原地区八木<sup>やぎ</sup>）が兼務している。



第1図 遺跡の位置 (1/5000)



第2図 調査区の位置

## 第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

平成13年6月11日朝、龍泉寺住職から町教育委員会に、道路工事中に文字が書かれた小石が多数出土したという電話連絡があった。現場は上野原町桐原字尾続907番地の宝珠寺参道入口で、中山間地域総合整備事業の一環による営農飲食用水施設建設に伴う道路拡張工事が行われている最中であった。現場を確認したところ、重機で掘削された道路脇の斜面に小石の集積部が露出し、一部が付近に散乱していた。石の表面に墨書きが確認されたことから、一石絆を埋納した経塚の可能性が考えられ、急速、県学術文化財課・経済課・現場責任者と遺跡の取り扱いについて現地協議した。この結果、遺跡残存部の現状保存を前提に、町教育委員会が遺跡の現況を把握するための調査を行うことになり、調査完了まで工事は中断されることになった。

調査は、6月15日、山梨県富士北麓・東部地域振興局から文化財保護法に基づく遺跡発見の通知書が提出されたのを受けて実施された。主な調査内容は、石の集積状態や土層の確認と、散乱した経石の回収やサンプル採取であり、同日中に終了した。その後に工事が再開され、掘削した斜面はすべてコンクリートブロック積で覆われたが、集石の露出部分は、コンクリートの裏込めで破損しないように上で覆う処置が取られた。



第3図 遺跡発見時の状況

### 第Ⅲ章 調査の成果

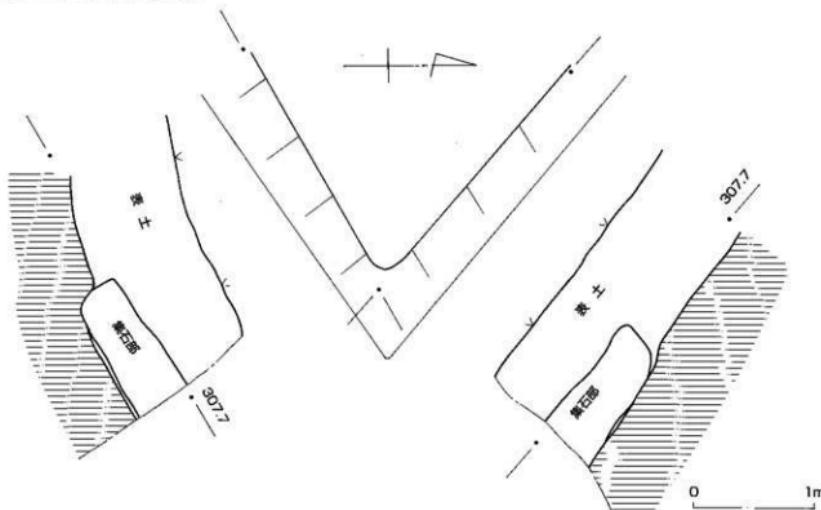
尾続経塚遺跡は、宝珠寺の参道入口で、万葉塔や地蔵尊などの石造物が立ち並んだ一角にあった。経石の集積部は斜面地に位置し、地表下60cmの表土からローム層中に構築されている。地元の話によると、直上に「妙典」と刻まれた石碑があったというが、調査段階では工事のため移設されていた。

経石は土坑内に集積されていた。土坑の平面形態や規模は不明だが、南北約2m・深さ40cmが残存する。壁は緩やかに立ち上がり、底面はハードローム層中に構築され平坦である。

出土遺物は経石のみである。経石は土坑内に隙間なく詰められ、ほぼ水平方向に揃っていた。上面は平坦であった。経石は2~6cm大で、角が丸く平滑な面を持つものが多いが、付近の土壤に多く含まれる角礫とは異なることから、多くは船川から集められたものと思われる。総数は不明である。採取したサンプルは524点で、このうち100点に墨書きが認められたが、文字が判読できたものはさらに少なく27点に止まった。大半は一石に一字が記された一字一石経であるが、両面に墨痕がある石が2点認められた。

経碑は、高さ59cm・幅30cm・厚さ30cmの自然石で、中央に「妙典」と刻まれている。他に銘文は無い。台石は40cm四方の平面方形で、三辺を打ち欠いて整形されている。建立年は不明である。

なお、本経塚から北方約80mの谷一つ隔てた山中に、5基程度から成る石造物群（庚申塔・馬頭觀音・百番供養塔）があり、この中に「石経塔」と刻まれた石碑があった。付近は急斜面のため、石経塔を含め数基が斜面直下の県道まで転落している状況であった。地元の話によると、県道が整備される以前の上野原と西原を結ぶ街道は、この場所を通っていたという。石経塔は、高さ76cm・幅35cm・厚さ29cmの自然石で、台石があったようだが未確認である。銘文は、碑の中央に「石経塔」と刻まれ、右面に「書寫都合九人 宽政十戊午三月良日」、左面に「宝珠現住黙堂代 施主山口惣兵衛 行年七十三建立」とある。この場所に経塚があったかどうかは不明である。



第4図 経塚の平面・断面図 (1/40)



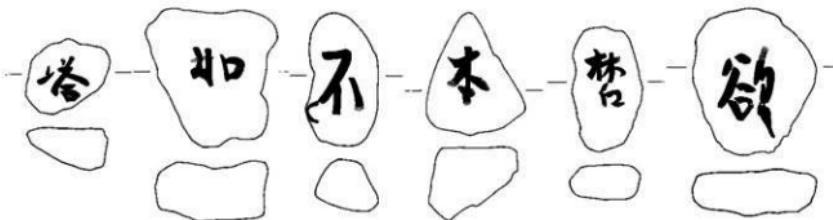
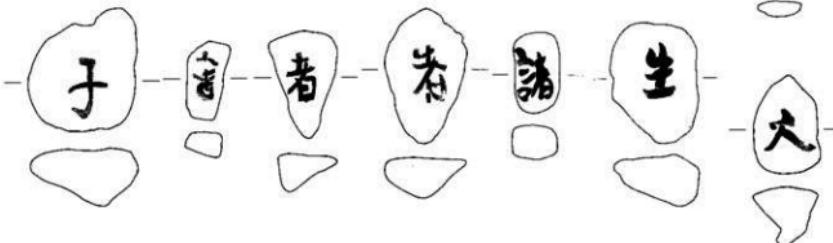
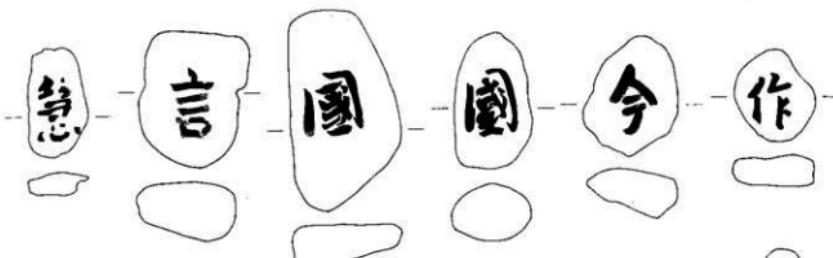
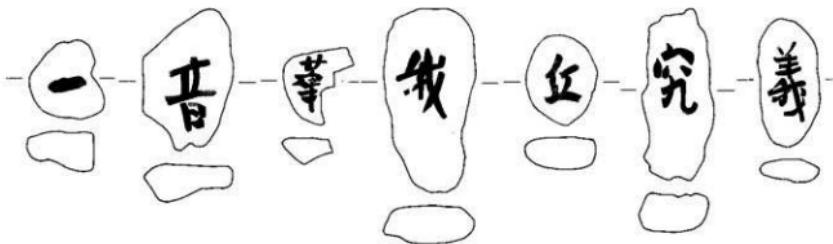
第5図 経塚の発見状況（右下）



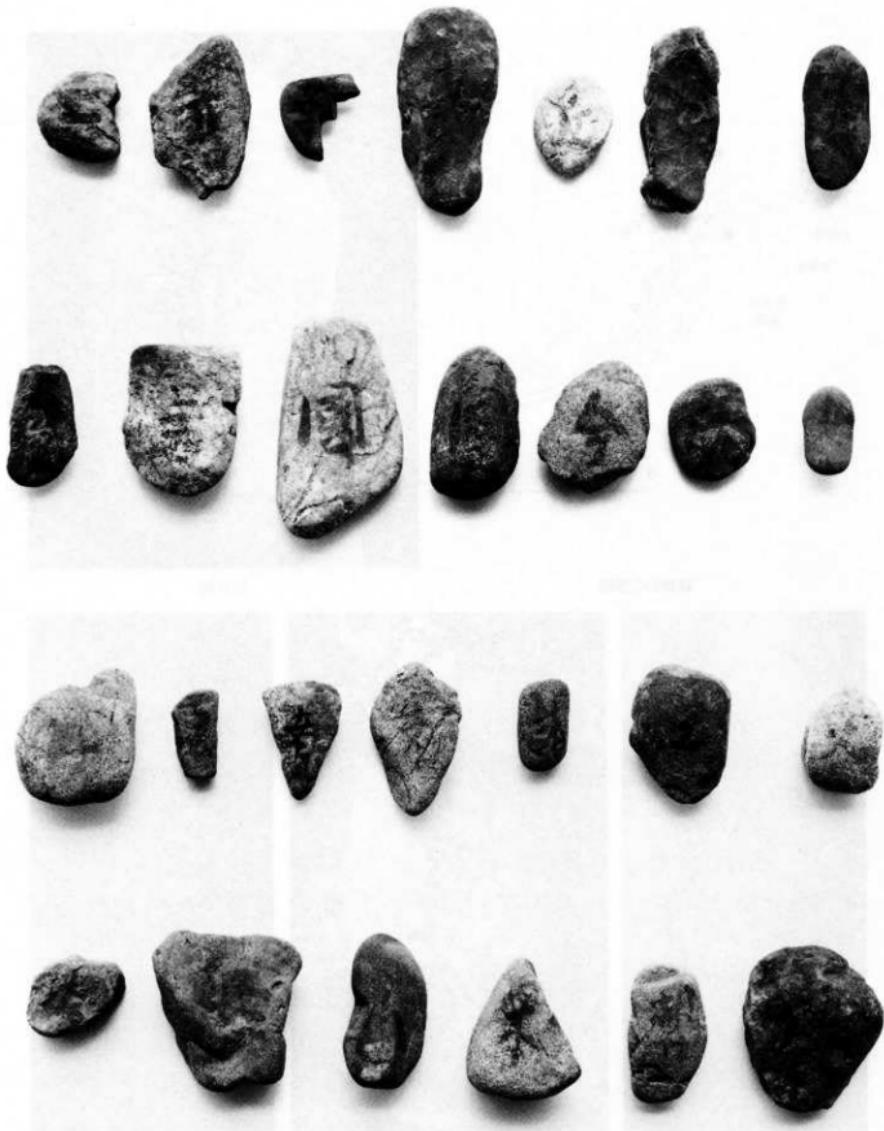
第6図 土層断面



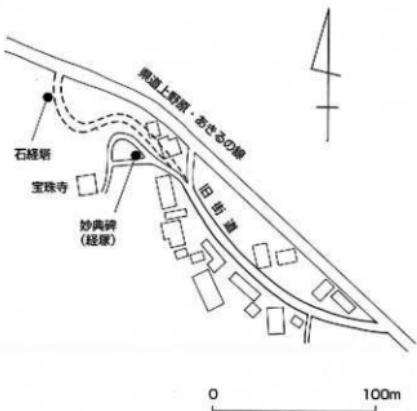
第7図 経石の出土状況



第8図 出土遺物 (1/2)



第9図 出土遺物



経碑の位置図



妙典碑



(左面)



石經塔（正面）



（右面）

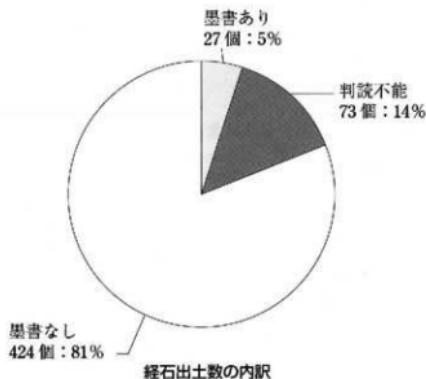
第10図 経碑（上：妙典碑、下：石經塔）

## 第Ⅳ章 まとめ

尾続経塚は未周知の遺跡であった。上野原町内では、数箇所において一石経の経塚を対象とした石經信仰が知られていたが<sup>(1)</sup>、一石経の経塚造構が具体的に確認されたのは本例が初めてであり、山梨県東部の郡内地方では大月市近久保・富士吉田市富士山北口一合目に統いて3例目となる。

### (1) 遺構と遺物

尾続経塚は、地中に穴を掘って経石を埋納したもので、上部に経碑「妙典」が建てられていた。穴の中には経石が隙間なく詰められ土壤の混入が見られないことから、石の埋納は短期間に行われたことが推定される。経石は2~6cm大で、角が丸く平滑な面を持つもので占められ、付近の鶴川から選別して採取されたことが伺える<sup>(2)</sup>。経石の総点数は不明だが、全体では数万個に及ぶ膨大な数であったであろう。採取したサンプル資料のうち8割には文字が認められなかったが、この傾向は各地の事例でも見られ、一般には釋の総数により功德があるものと解釈されている。文字のある経石の大半が一字一石経であった。書写した經典の種類は不明だが、経碑にある「妙典」は法華經を意味するとされることから、法華經を書写した可能性が強い。



一	1	音	1	華	1	我	1
丘	1	究	1	義	1	慧	1
言	1	国	2	今	1	作	1
子	1	舍	1	者	2	諸	1
生	1	大	2	塔	1	如	1
不	1	本	1	梵	1	欲	1

経石文字一覧表

### (2) 経塚の造営時期・造営者・造営目的

これらを直接示す物証は今回の調査では発見されなかつたが、解明の手掛かりとして近隣の山中にある石経塔が挙げられる。石経塔の銘文からは、寛政10年、宝珠寺の黙堂や山口惣兵衛が中心になって、複数の人々の参加を得た中で経石の書写が行われたことが分かる。このうち黙堂は、宝珠寺歴代の住職中「黙堂聞和尚」と同一人物と思われ、宝珠寺移転後の寛政8年（1796）に住職であったことが知れる<sup>(3)</sup>。一方、山口惣兵衛の名は、付近の石造物や尾続神社棟札に見られる<sup>(4)</sup>。いずれも同一人物と思われるところから、惣兵衛が宝珠寺移転前後（安永～寛政期）の人物で、尾続地域の名主を務め、地域の造塔・造仏・社寺造営に中心的な役割を果たしたことが伺える。さらに、宝珠寺の檀家である尾続地域は山口姓が多く、血縁関係の強い地域である。石経の書写に携わった9人は、地域の血縁者で占められた寺の檀家であったことが想定できる。

石経塔が尾続經塚の經碑であったのか、あるいは別の經塚の存在を示すものなのかは不明確である。仮に前者を考えれば、同一の經塚に対し2基の經碑が場所を違えて設置されたことになる。このような事例が他にあるもののか知らないが、両者の設置場所を見ると、第10図のように旧街道沿いに位置することが分かる。石経塔の付近は険しい山道で、經塚の造営には適さないものと思われることから、石経塔は、尾続經塚の造営に当たっての功績者を讃える顕彰碑として集落の入口に建立されたものと理解することはできないだろうか。いずれにせよ、尾続經塚が天明5年（1785）の寺移転後に造営されたと推定され<sup>(5)</sup>、この時期が石経塔の造立年代である寛政10年（1798）と重なることから、石経塔が尾続經塚の造営を考えるうえで重要な資料であることは言えるだろう。

尾続經塚の造営目的は不明確である。一般に近世の一石経は、多数の人と多量の経石を用いることによって大きな功德が生み出せるという多数作善の思想に基づくものとされ、広範に信者を結集し、一人一人が少しの經典寄写を行い、多量の書写を成就することで、五穀豊穣や病魔退散などの願いがかない、あるいは經文の呪力によって追善供養や逆修供養に効果を期待したものと考えられている<sup>(6)</sup>。尾続經塚も、概ねこのような思想・目的に沿って造営されたものと思われる。とくに、石経塔の建立時期である寛政10年（1798）は、宝珠寺が現在地に移転して13年後に当たり、地域の結束力が高かった時期でもある。また、この1800年前後の時期は、町内に残る祠塔碑の造立数が急増し、ピークを迎える時期でもあり、この理由として、農業技術の進歩や貨幣経済の進展による庶民の経済力向上が背景にあったものと指摘されている<sup>(7)</sup>。このような、寺院移転などを契機とした地域の結束力の高まりや、経済力向上を背景とした宗教行為の多様な発展が、本經塚の造営を促した要因として考えられる。

今回の調査は緊急性の高いものであったため、地域に伝わる文献や伝承調査を含め、十分な分析を加えることができなかった。今後の課題である。

- 註（1）「民間信仰の種類」『上野原町誌（下）』上野原町 1975。この中で、他地[西]において石経信仰に伴う祭礼が近年まで続いている事例が報告されているが、尾続地城では地元の説によると經塚の存在自体が知られていないかったようだ。
- （2）大月市久保經塚の経石は、赤褐色の趣が意図的に用いられたことが指摘されているが、尾続經塚では色褪による差異はなかった。杉本正義「近久保經塚」大月市教育委員会 1990
- （3）『建長寺史 本寺編』建長寺1977。墓碑の銘文に「前住當山靈應庵元桜樹 天保四巳九月二日」とある。
- （4）寛政2年（1790）地蔵尊銘文「寛政二述才大宝珠寺現住 開山塔不尊愛宕地蔵尊一月二十四日 旗主山口米兵衛」
- 安永3年（1774）棟札銘文「奉造延不動明王金山棟現所壓祈所 天下泰平安永二甲午歲 神主尊教 名主山口豊兵衛 尾續村氏子中（以下略）」
- 寛政10年（1798）棟札銘文「奉造延金山大權現本地不動明王守護處 天下泰平寛政拾歲 尾續邑 神主 他寿院 山口喜兵衛（略）、裏面「寛政十歲 御信心之方 尾續邑 山口豊兵衛 同壽兵衛（以下、山口姓の計7名を列記）」。
- 山口家の墓誌に「寛政十二年十月八日 豊兵衛」死去の銘文がある。
- 引用文献『檍原の石造物』上野原町教育委員会 1980、秋山敬『山梨県史資料叢書 山梨県棟札調査報告書 郡内Ⅰ』山梨県 1995
- （5）文化3年（1806）桐原村繪図（都留市・森崎家文書）では本寺が現在地に描かれているが、經塚を示すものはない。【都留市史 資料編 都留村繪図・村明細帳集】都留市 1988
- （6）田代孝『民間信仰遺跡分布調査報告書－近世の經塚－』山梨県教育委員会 2001
- （7）「祠塔碑から見た民間信仰の変遷」『上野原町誌（下）』上野原町 1975

## 報告書概要

フリガナ	オブクキヨウヅカイセキ
書名	尾続経塚遺跡
副題	県営中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ	上野原町埋蔵文化財調査報告書 第11集
著者名	小西直樹
発行者	上野原町教育委員会、山梨県富士北麓・東部地域振興局
編集機関	上野原町教育委員会
住所・電話	〒409-0112 山梨県北都留郡上野原町上野原3504-1 電話0554-62-3111
発行日	平成15年(2003)3月25日
印刷所	中島印刷株式会社
尾続経塚遺跡	所在地 山梨県北都留郡上野原町桐原字尾続907番地 地図名 1/25000上野原 北緯35°38'50" 東経139°05'50" 標高309m
概 主な時代	江戸時代
主な遺構	経塚
主な遺物	一字一石経
要 調査期間	平成13年(2001)6月15日

上野原町埋蔵文化財調査報告書 第11集

## 尾続経塚遺跡

平成15年(2003)3月25日発行

編集 上野原町教育委員会

発行 上野原町教育委員会

山梨県富士北麓・東部地域振興局

